

日本人大学生の「日本語」教育を考える

—その問題点と教育の方向性—

三宅 和子

(東洋大学 文学部 日本文学文化学科)

1. 日本人大学生になぜ「日本語」教育が必要か

ここでいう「日本語」教育とは、国語教育で語られてきた枠組みを超えて、日本語を第一言語として使い自己を表現するのに必要な「日本語」の教育という意味である。これは、従来「日本語教育」の仕事とされていた教育をも含むものである。

ことばは、それが使われる社会や文化の変化と無関係ではいられない。めまぐるしく変わる現代社会のなかで、大学生のことばへの認識も自覚も、ことばの使い方も変化している。「ことばが乱れている」「ことば遣いを知らない」などよくいわれるが、「ことば」だけで現象を捉えていては問題は解決しない。

以下は大学に入学してきたばかりの学生の文章の実例である。「現代日本語表現」という授業で、<この文章を自分ならどう変えるか>をめぐって学生と話し合った。自己のことばに対する認識を喚起するのに格好の例であった(但しこれは例外的に論議を呼ぶ文章例であり、学生の代表例ではないことを断っておきたい)。

<例>「日本語概説」の一週目の課題「三種類以上の辞書をひき、『国語』と『日本語』の項の記述の違い、取扱いの違いを調べ、それぞれの意味の違いを纏める」の後につけたコメント(添付資料参照)

国語は特に、日本だけってという感点ではなくて、国の言葉として使用していると思った。国の中で私的なものではなく、公的なものとして。

それに対して、日本語は、国語よりも硬さをなくした感じで日本人同志のやりとりのために使われている言語だと思った。だから、調べた感じ、今まで、日本語と国語の違いなんて、考えてもいなかったけど、調べてみると面白いし、なんでもっと早く、そのことに疑問をもたなかったのだらうと思う。私たちは小さなころから、国語を自然と使っていたから分からなかったのかなとも思った。

2. 大学における教育

「日本語」教育は、大学の教育の問題と無関係では語れない。ことばの指導には、例えば以下のようなことを考えざるを得ない。

- ① 大学はどのような教育をしようとしているのか
- ② 学生は大学に何を期待しているのか
- ③ 学生の授業への関心や学習態度はどのようなものか
- ④ 学生はどのような価値観・人生観をもっているのか

- ⑤ 学生の日本語力・日本語観はどのようなものか
- ⑥ その他

今回は、主に⑤に焦点をおき、〈レポートを書く〉という大学教育で最も典型的な作業のプロセスを指導する際の問題点と方向性について、「国語教育」との関連から述べたい。

3. レポート作成に必要な指導

3-1. レポート作成で重要なこと

1. の実例で問題になっていることを含め、以下のことについての指導、および学生の自覚・気づき(awareness)が必要と思われる。

- ① 誤字 ②語彙 ③書きことばと話しことばの違い ④構成
- ⑤ 研究の手順 ⑥発想力 ⑦考察力 ⑧推敲 ⑧その他

現在普及している「論文・レポートの書き方」の類書の内容

旧来のタイプ(国語教育的)…③、④、⑤、⑧あたりが中心

新しいタイプ(日本語教育的)…①、②、③、④、⑤あたりが中心

記述・指導が不足している点…⑥、⑦ →思考のプロセスをみていくことの必要性

3-2. レポート作成上の(学生の)問題点

- ① 主に技術面：学校で教えられていない→高校までの国語教育では…
 - ・ ことばの教育(「表現する」教育)の不足
 - ・ 自分のことばを客観的に自覚する機会がない
 - ・ O×式教育/白黒判断教育→短絡的(表現が単語レベル)、正誤に興味が集中
 - ・ 入試小論文の弊害→現状ではレポートでも短い「論文」でもない
- ② 主に思考面：現代日本社会の問題
世間の枠組(ムラ社会で長年育まれてきた価値観)と、現実生活(欧米的、ポストモダンの価値観)とのずれ→考えにくさ、生きにくさ
- ③ 主に学習面：学校という枠組みの中の学生
 - ・ 受動的な学習姿勢：「自ら学ぶ」のではなく「教えてもらう」志向
 - ・ 自意識：周りを気にする習性、目立つことへの怖れ
 - ・ 「正しさ」へのこだわり：「間違い」を怖れる
 - ・ プロダクト重視：プロセスの重要性への認識欠如
 - ・ 表面的処理：課題をおどなりに遂行、課題が出された意味について考えない
 - ・ 群れの中の一人：個人として教師や他者と対峙することをしない

4. <レポートを書く>指導

4-1. レポートの種類

大学で出されるレポートはまず、1)自由課題か 2)与えられた課題かで分けられるが、2)であることのほうが多い。大学初年度に実際に与えられるレポートは、「…についてまとめよ」、「…について調べよ」など、調べることに重点を置くもの(Aタイプ)が多い。しかし「論文・レポートの書き方」類書の内容は、論文につながる(自分の意見、仮説があり、

それを基盤に調査していく) ようなレポート (B タイプ) の作成を主眼に置く記述が多い。また、大まかな課題「…について」を出し、学生の関心事と関連付けて調べ、レポートを構成していくことを期待するもの (C タイプ) もあり、同じアプローチの仕方では対処できない。効果的な指導には、まず学生の与えられるレポートはどのような種類のものかを調査する必要がある。

レポートを実際に書く段階では、過去の学生が提出した適切なレポートを提示して参考にしよう指示すれば、学生自身がそれぞれのレポートタイプにあった構成や論の進め方を効果的に自ら学ぶ。しかし、レポートの課題をどのように捉えるか、どのように調査を進めるかなど、「考えるプロセス」の指導は、最も重要であり教師の介入が必要とされるにもかかわらず、従来あまりなされていない。

4-2. 「現代日本語表現」レポート指導の実践例(前期12回)

学期末に「若者のことばについて」という課題でレポートを書き上げて提出することを目標に、表現技術と思考プロセスの両側面の指導を考えた。最初のところで、レポートらしい言語表現やスタイル、文章構成の知識について考え、徐々に、レポート作成のプロセスを導入するという形をとった。

- 1 - 4 回目 技術：論文・レポートで使われる表現、使ってはいけない表現
思考：よい論文・レポートに必要なものは？
- 5 - 6 回目 技術：参考文献の引用→他人のデータ・意見と自分の意見を明確に区別
思考：レポート課題「若者のことばについて」に、どうアプローチするか
- 7 - 8 回目 技術：論文とは・論文の構成
思考：課題へのアプローチの仕方を考える (学生の実例をもとに)
- 9 - 12 回目 技術：序論、本論、結びの内容と展開
思考：課題と自分のテーマを結びつける
自分のテーマを追及するために必要なプロセス
課題を書くために必要なデータ集め・調査
レポート全体の構成

NB：レポート「若者のことばについて」を書くにあたって、必要最低限のプロセスは…
「若者のことば」の定義→自分のテーマをもつ→アプローチ方法・手順→構成

多人数(70~80人)の受講生を実践的に指導するという目標に向けての工夫

- ①ファイルブック提出の義務化 (大人数だがインターネット使用環境にないという制約)
- ②学生は毎週ファイルに作業結果と疑問・問題を入れて提出→学生のプロセスが分かる
- ③教師は個々人に丁寧な指導はできないが、学生はヒントをもらって自ら学ぶ力がある
→教師は毎週ファイルを概観し、学生の認識が必要な点をリストアップしておき、次週の授業中に説明する。個別指摘が必要なもののみ、個々のファイルに記述して返す。
- ④学生は毎回返されたファイルを見て、授業中指摘された事柄に関して自分のレポートは問題がないかを確認する
- ⑤学生はどのように書くかに加え、どのような問題意識をもち、どのように問題にアプロ

一ちしていくかを考えることが大事であると気づく

テキストとして『大学生と留学生のための論文ワークブック』（浜田麻里、平尾得子、由井紀久子 1997 くらしお出版）、引用テキストとして『レポートの組み立て方』（木下是雄 1994 ちくま学芸文庫）を使用。

授業中、学生からあがった疑問・質問、および学生の問題点

- ・どのようなことばが話しことばなのか、話しことばで書いてはいけないのか
 - ・論文調でなければだめか→高校の先生が話しことば的レポートは個性的でいいといった
 - ・段落から段落へどうつなげればいいのか
 - ・章から章への変り目をどうつなげればいいのか
 - ・どんな資料を探せばいいか、調べ方が分からない
 - ・どう課題にアプローチしていいか分からない
-
- ・論理の飛躍に気づかない
 - ・インターネットの情報と学術情報の、信頼性と価値について、違いがわからない
 - ・事実と意見・感想の違いがわからない
 - ・芋づる式に調べていく意欲・能力の欠如
 - ・大きなテーマと小さなテーマの区別が分からない
 - ・分野や指導の教師によって、いわれることが違う
 - ・多数のいいかげんな態度の学生と、少数の非常に真剣な学生がいる

5. 「日本語」教育・大学教育の方向性

これからの大学教育を考えると、これまでの学問観・教育観のままでは指導が難しくなることが考えられる。新しい世紀に生きる人々の教育には意識の変革が必要だ。筆者の「日本語」教育も、以下のような教育観に支えられている。

旧学習観：教師は情報や知識をもつ者であり、浅い知識しかない学生に教える役目をもつ
「先生は何でも知っている」（知識重視）→学生は先生に教えてもらう

新学習観：教師は学生がもたない知識をもっているというより、人生や学問実践の経験に育まれた学問の考え方や考察方法など対象へのアプローチの仕方を知っている
→学生は自分で探求しながらアドバイスをもらい、アプローチを考えていく

NB：インターネットなどの新しいメディア・ネットワークの開発は、若者の人間関係のあり方、情報取得の方法に影響を与えている。いまや年齢や経験に関係なく多量の情報が得られるようになった。

大学における教授と学生との関係は…

従来の価値観：目上 vs. 目下、知識者 vs. 無知識者、経験豊富 vs. 経験寡少

新しい価値観：若くても詳細な情報が得られる→知識伝授のための教師像が成り立たない
教師の歳をとっている（学問を重ねる）意味が問われている
→協力的で、生産的で、クリエイティブな関係へ